

千葉県森林インストラクター会 会報 2003年正月号

年頭の挨拶

全国会・現地研修会に向け 各人の能力結集による シナジー効果を期待します。

会長 町原 亨

新年おめでとうございます。

本年も宜しく願い申し上げます。

当会は設立して8年になりますが、16名でスタートして現在は50名の集団に成長し、15年度は更に10名強の新鋭の加入が期待されます。員数が増えさえすれば良いという訳ではありませんが、先ずおめでたい事と思っています。

今年の当会の活動につきましては、三本柱ともいうべき、「もりこん」「昼の講座」「野外講座」の更なる充実を図ると共に、講師の出番を増やす為にも回数や行動範囲の拡大を検討したいと考えています。

更に、今年は「全国森林インストラクター会・現地研修会」を千葉県内で実施する事になりました。これは全国植樹祭が開催される県の、インストラクター会が引き受けるのが通例になって居り、今年は千葉が当番です。

一昨年は山梨で富士山が、昨年は山形で月山のぶなの紅葉が背景となり、その迫力は大したものでしたが、本県は「海の見える山で森の勉強をしよう。」というようなテーマで行こうと考えました。

12月11日の幹事会で、フィールドは東大千葉演習林を第一候補とし、宿泊は鴨川周辺、時期は蛭の出ない11月下旬と決めました。

今後は実行委員会の所管とし、第1回の委員会は1月16日に開きます。幹事の出席は勿論ですが、実行に際しては少なくとも20名以上の人手が必要と思われるので、幹事外でも、助っ人になって下さる方は是非下記に集まって下さい。

日 時 1月16日 18時

場 所 船橋中央公民館 第5集会室

当会は、森を愛する事を共通点にして、各種の能力を持つ人の集団であり、その活動はチームプレイを旗印にしています。この多士済々の集団が一つに纏まれば、人数に数倍する力が発揮される筈です。その証拠が昨秋の「全国森林文化教育シンポジウム」の委託業務の完遂であったと思います。今年も前述の「全国研修会」の他にも「困難であるが、やり甲斐のある仕事」が舞込んで来るかも知れません。それを請けて頂く皆様には、常日頃、好き、又は得意の部門を精一杯勉強して戴きたいと思っています。

私自身も勉強したい事が沢山ありますが、取り敢えず気になっている事は次の3点です。

国産材の自給率18.2%(H13年度)の危惧。(世界の木材情勢から、現行は仕方がないと思うが、納得できた訳でもない)

一般に、森林の多面的効用が認められているにも拘らず、その見返りに関する論議が少な過ぎると思う。

これは私事ですが、地球温暖化防止に寄与する森林の機能を根本的に理解したい。最後になりましたが、本年も皆様の、健康を第一にしてのご活躍をお祈りして、新年の御挨拶とさせていただきます。 以上

森林環境教育全国シンポジウム

育み、活かし、つなげよう。森と私たち

森林環境教育が創る森林と人との新しい関係

平成14年11月9日(土)と10日(日)の両日、千葉・山武町(ふれあいセンター/中央会館/千葉県森林研究センター/さんぶの森公園)にて、森林環境教育全国シンポジウムが開催されました。これは、「森林環境教育を通じて、森林・林業の果たす役割を広く国民に認識してもらい、森林と人との新しい関係の創造をめざす」もの。このシンポジウムに千葉県森林インストラクター会も5つのプログラム体験を担当するなど、積極的に協力しました。

森林環境教育全国シンポジウムの概要

開催日時：平成14年11月9日(土)/10日(日)

開催場所：千葉県山武町

参加者：都道府県・市町村林務担当者、森林組合・林家等の森林・林業関係者、学校教育・社会教育関係者、環境教育事業者、建設・設計関係者、森林づくり・地域環境問題等に取り組む市民や企業、一般参加者など約300名

主催：全国森林組合連合会

後援・協賛団体：林野庁、文部科学省、環境省、千葉県、第54回全国植樹祭実行委員会、千葉県教育委員会、山武町、千葉県森林組合連合会、日本木材学会



プログラム：

11月9日(土)

- ・ 開会
- ・ スライドショー
- ・ 基調プレゼンテーション「森林環境教育が創る森林と人との新しい関係」(進行・コーディネーター=木文化研究所代表・水野一男/プレゼンター=各分科会コーディネーター)
- ・ 分科会(コーディネーター)

木の文化を伝える森林教育(東京の木で家を作る会・稲木清貴)

木材利用と森林環境教育(東京農工大学助教授・佐藤敬一/愛知教育大学教授・宮川秀俊/奈良教育大学教授・谷口義昭)

森林環境教育から見えてくる新時代の林業(林業家・森林インストラクター・原島幹典)

当会からは寺嶋嘉春さんが、「各地の事例報告から学ぶ新時代の林業観」の報告者の一人として参加しました。

生物多様性・環境負荷に配慮した森林環境教育(ワークショップ・ミュー代表・藁谷豊)

まちとむらを結ぶ森林環境教育(JUON NETWORK 事務局長・鹿住貴之)

森林環境教育の教育手法(財団法人キープ協会常務理事・川嶋直)

総合的な学習の時間と森林環境教育(岐阜県立森林文化アカデミー・高田研)

- ・ プログラム体験(千葉県森林インストラクター会担当)

11月10日(日)

- ・ 分科会(続き)
- ・ プログラム体験
- ・ 全体会
- ・ 解散

森をしらべる

町原 亨

1. 日 時 平成 14 年 11 月 9 日 (土) 13:00
~ 17:00 / 10 日 (日) 9:00 ~ 12:00
2. 講 師 町原 亨・廣島真知子・関根
亨・和田 晟・小池英憲
3. プログラムの概要

森の現状を数量的に把握する為の、初歩的なプログラムであり、この数値に基づき、今後の施業方針や、延いてはCO₂の吸収状況等が推測出来る。具体的な作業としては、時間、労力を省く為、簡単な標準地法により測定値を算出し、面積倍率を乗じて、母集団となる森林の数値を推定、把握する。

受講者を5人1チームとし、チーム毎に予め設定した標準地を指定する。

チーム毎に、標準地の樹高、胸高直径を測定、野帳に記録。

伐根により年輪を数えて、標準地の林令を推定する。

屋内に移動し、チーム毎に、野帳の測定値により、標準地の幹材積合計、平均直径、平均樹高、立木本数密度、幹材積合計 / ha を計算し、該当標準地の林況を数値により把握する。

標準地の幹材積合計から、この林分のCの固定量、並びに植栽後現在に至るまでの、CO₂の吸収量を推定する。(但し枝葉と森林土壤に含まれる量は計算から除外)

母集団である「さんぶの森公園」の森林と、標準地の面積比から、「さんぶの森公園」の森林全体の幹材積、Cの固定量、CO₂の吸収量の合計値を推定する。

現物を見ての測定、算出であり、参加者は、対象林分の木材利用としての価値、並びに森林が地球温暖化防止に如何に貢献しているかを、実感を持って理解される事を期待する。

標準地は、杉主体の桧が混じる人工林から3箇所を設定した。

A 地点 = 100 ~ 150 年生の異令林 20m × 40m

B 地点 = 35 年生程度の同令林
10m × 20m

C 地点 = 30 年生 " " 10m × 20m

4. 所要測定器具

- a. 巻尺、5 個 県林試より借用
- b. 輪尺又は直径巻尺 5 個 "
- c. 測高器 (デンドロメーター又はワイゼ) 5 個 "
- d. 野帳 5 冊及びチョーク若干

森の恵みを活かす

菅野 興文

1. 担当者 海野知子、高橋守、菅野興文

2. 参加者 11/9、11/10 とも 20 名前後

子どもたちや一般市民を対象に森の恵を考慮してもらった場合における森林環境教育の一つとしてのプログラムとしての提案である。

森の恵み 森の中から薪を集め燃料として使う。

森の恵み 孟宗竹を使って炊飯をする。

森の恵み 秋収穫したクルミ、ムカゴ、ギンナン、ブナの実を炊き込みご飯の具に使う。

森の恵み 食後のデザートにムクの実を食する。

森の恵み 孟宗竹で出来た食器類、お椀、箸それにへらを作る。

森の恵み 炊飯用に使い終わった孟宗竹は燃料として再利用する。

・1 グループ 5 ~ 6 人前後で 3 ~ 5 グループの構成とした。

・子どもたちを対象とする場合は火や鉋の取り扱い、注意点を説明する。

・使用する材料は春の季節ならば、野草の天ぷらを添えてみても良い。

当日のメニュー

「青竹筒炊飯ご飯」

材料：青竹筒 内径 7 ~ 10cm、節間長さ 25 ~ 30cm 1 個につき/無洗米 320g (2 合見当、茶碗 4 膳分) 水 420cc/白だし 15cc (大匙 1) /醤油 15cc (大匙 1) 炊き込み材料 (ギンナン、ムカゴ、クルミ、ブナの実) 適量



調理方法：

無洗米を竹筒に平に入れる
分量の水と調味料を入れる
炊き込み材料を入れて蓋をして火にかける
強火で水気がなくなるまで一気に炊き上げる
火から下ろし数分蒸らす

「スープ」

鶏肉、キノコを竹筒に入れる
水とだしの素を入れる
煮立ったら火から下ろし各自、適量の醤油、
味ポンで塩味をつける

森であそぶ

望月 力智

〔担当〕小林正幸、鳥海翔、御須裕子、元岡真也、望月力智

〔参加者〕第1日目12名、第2日目9名、
森林組合、森林ボランティア、林業・緑地行政関係者など、

〔位置付け〕子供たちを対象とした森林環境教育の中で、森林を体験する。森林について学ぶ。森林の保全のために行動する。のとして位置付け、手法を提示するというスタンスで、「手軽に！素朴に！素敵に！」をコンセプトにして、各アクティビティを紹介させていただきました。

〔内容〕

オリエンテーション・名札作り

クヌギの落ち葉を使って、ガムテープを接着剤とし、名札を作りました。

名札は、参加者同士のコミュニケーションのためには必要でありながら、市民団体では財源も少なく悩みの種ですが、この方法だと、経費も少なくすみ、子供など参加者にもとても好評です。そのまま、樹木に親しむためのアクティ

ビティにもなります。

保護色ゲーム

ネイチャーゲームの「カモフラージュ」を取上げました。自然観察への導入の効果とアイスブレーキングの効果が期待でき、子供だけでなく大人も、思わず夢中になります。

森の百面相

山武スギの林に入って、落ち葉などを使い、スギの立木の幹をキャンパスとして、顔などを描いてもらいました。接着剤としてご飯粒を使い、サインペンを使う際には直接立木には書かない、など自然を出来る限り損なわない配慮をしました。参加者たちは、こちらの意図をはるかに越えて、幹だけでなく、林内の切り株や風倒木の根株、積み重ねた丸太の断面までもも活用して、様々な表情を表現していました。

付けられたタイトルは、「森は泣いている」「奄美のクロウサギ」「木漏れ日の微笑」「グアアアア」など、とても楽しく創造力に満ちた作品が勢ぞろいしました。企画した我々も、思わぬ創造の広がりにとっても感動しました。

実際に子供たちを相手に行なってみると、このアクティビティを通じて、木や森に親しみを感じ、非常に身近に感じられるようです。それが、まさに森林環境教育の重要な第一歩だと思います。

森のかくれんぼ

各環境教育プログラムやわが国に伝わる子供の遊びの中にも、ちょっとした展開の違いで、様々なかくれんぼや鬼ごっこ、それらに類するアクティビティがたくさんあります。今回は、山武スギの大径木の林を活用することを先ず考え、生き物たちの捕食者と獲物の関係を、かくれんぼとしてゲーム化しました。

大人といえども夢中で走ったり、一所懸命隠れているつもりでも背中が見えたり、笑いを誘



百面相づくりに励む参加者たち。その豊かな発想に驚かされました。

う楽しい雰囲気の中にも、野生たちの必死な生き様が見えてくるようでした。

小枝のキーホルダー

特別な材料を使わず、特別な技術も道具も要らない、子ども達にとっても遊び感覚でできるクラフトを取り上げました。材料は、森の中に落ちている小枝です。「手軽に！素朴に！素敵に！」のコンセプトそのものです。昨今の子ども達は、刃物を持つ機会がほとんどなく、その基本的使い方、マナーでさえ知りません。一方、昔の子供も今の子供も時代に関係なく、作ることは、本能的と言っていい程に大好きです。

刃物についての基本的知識と技術を習得するとともに、創造の楽しさや喜びを体得するために最適なアクティビティです。

〔参加者の質問より〕

問：子ども達の気持ちを引き付けるためのコツは？

答：子供たちに理屈や知識を教えるよりも、子ども達が持っている興味や知識を引き出すように心がけると良いのでは・・・。

問：動植物についての知識に自信がない時は？

答：子供用の図鑑を持ち歩いて一緒に調べる、名前を教えようとするより名前つけゲームを行う、など。

問：体験や気づきから行動へのプログラムを組んでいくには、どんな内容が考えられるか？

答：年齢にもよる。森作り作業なども考えられるが、低学年でもできるゴミ拾いも行動の一つ。

〔留意点〕

プログラムを展開する上で、フィールドの特性（自然の状態、場所の状況、位置関係など）を生かすことが重要なポイントになります。また、グループ分けや場所の移動も、できるだけゲーム化、アクティビティ化することにより、子供たちの気持ちを引き付けるとともに、時間や自然素材の有効化につながります。一方、その特性に沿って綿密に考えれば綿密なほどに、融通性を欠き、不測事態への対応が困難になって、注意が必要です。

今回は、主催者の連絡ミスによる時間の短縮、参加人数の減少、予想以上の寒さなどのため、上記プログラムを、全体としてはかなり足早に進行する結果となりました。

相手が子供ですと、時間の配分なども大人と同じようにはいきません。ちょっとした移動でさえ、十分な時間を要します。連絡不足や子供の年齢による反応の違いなど、よくありがちなことで、臨機応変な対応が必要となります。

参加くださった皆さんには、これらの点に改めて触れることができませんでした。この場を借りて、申し添えたいと思います。

森の働きを知る

國安 哲郎

1. 日 時 平成 14 年 11 月 9 日(土)13:00 ~ 17:00(参加者 12 名)/10 日(日)9:00 ~ 12:00(参加者 10 名)

2. コンセプト 水と土をはぐくむ森林の働きを知る

3. 担当 講師 國安哲郎 湯本信康

4. プログラムと実施内容

(1)プログラムのねらい

森の働き（機能）は、大きく分けて 8 種類ほどあるが、今回は場所柄、土壌保全・水源涵養機能をとりあげた。また、森林環境教育の対象となる子どもや一般市民に対し、簡単な装置・方法を用い、森林の働きを体験的に実感できる手法を参加者自身が実際に手がけてみて、今後の活動に役立てることをねらいとした。

(2)プログラムの内容と実施結果

森林の土の働き

公園内のスギ林の斜面と平地、クヌギ・コナラ林の 3 箇所、参加者みんなで 50cm 四方深さ 50cm の穴掘りをし、土壌断面、土質、土壌動物を比較観察し、森林土壌の働きをたしかめる。

同じスギ林でも斜面の崩積土、平地の堆積土、



土入れ作業を行う参加者

南面広葉樹林の乾いた表土などの違いを見て触って実感。土壌動物は、ミミズ、ヤスデ、ムカデなどの大型のものを観察。

使用道具は、スコップ、移植ごて、折れ尺など。参加者は、スコップの使い方一つから体験。降った雨のゆくえ

雨のゆくえの実験装置（発泡スチロールのト口箱などの簡単な器材）を参加者が最初から実際に作ってみる。その装置を使い、森林と雨水の流れの関係を、子どもや一般市民が目で見てもわかりやすく理解できる手法をみんなでたしかめる。（参考；『森林インストラクター入門』）

今回は、参加者を2組に分け、各組が3個のト口箱の装置を使い、コンクリート、土、森林表層の3条件で試み、流量の時間的な計量よりも各条件による相違を比較してみることに重点をおいた。

使用器材は、ト口箱、古い下敷き、塩ビパイプ、ジョウロ、コップ、ビニール網などであるが、同規格のト口箱の収集に苦労、水抜き穴の穴あけも皆そろわず、やってみて納得。

森林表層（草のついた表土）の容器から澄んだ雨水が出るのを見て、森林の働きを実感するも、土壌の採取の仕方、容器内の土圧など今後の反省点をみんなで体験した。

森の仕事を学ぶ

野間 元彦

フィールド＝山武町「中津田教育の森」

担当＝野間元彦、遠坂弘、和波牧子

参加者＝9日7名（全員県内在住。女性1名）、10日9名（愛知県1名、山形県1名、残り県内。女性1名）。大多数は林務関係公務員、その他は森づくりの会員など。

大多数の参加者のニーズ＝子供や一般の人を対象に間伐や枝打ちなどの作業体験イベントを行う場合の参考にしたい。

プログラム内容＝少雨・乾燥への対策としての複相林・択伐的取扱いなど山武林業の特徴を説明。

120年生～180年生のスギ上木の下に植栽され過密状態の10年生～20年生のスギ・ヒノキの間伐・枝打ち。間伐・枝打ちの意義と作業の基本を説明し、参加者全員に作業してもらう。作業の説明で特に意を用いた点＝受け口は何故必要か。受け口が浅いとどうなるか。深すぎるとどうなるか。受け口の開角が狭いとどうなるか。広いとどうなるか。受け口の下は水平でなければならないか。追い口が受け口下面より低いとどうなるか。高すぎるとどうなるか。受け口下面より追い口を高くする理由はなにか。重心方向の逆方向に伐倒するときはどうするか。懸かり木になったときはどうするか。一般の人が枝打ちに使う刃物はアサリのないバックテーパーの枝打鋸が適当であること、バックテーパーの意義。目より高いところの枝を打つ場合、防塵眼鏡が必要であること。

間伐材を使って何かを作る。

作業だけでは単調になりがちであり、また、間伐材を活用する体験も重要。序でにロープワークも体験してもらおうと、和歌山県の実業家真砂典明さんが開発したトライバランスをロープ結びで作成。結果は生木なので重く、乗って動かすのは困難。次いで、三脚しぼりで三脚を作る。飯盒炊さんでは、2台の三脚に横棒を渡し、針金で飯盒を吊り下げることが飯盒の高さを自在に調節できて便利と説明。ほかに汎用性のある「まき結び」とロープをコンパクトに収納する「棒結び」を体験してもらう。

配布資料＝町原さんから頂いた「山武の林業」および野間がまとめた「枝打ちの要点」

秋の東大演習林公開に のべ16名が協力しました。



恒例の秋の東大演習林公開が、11/23(祝)、24(日)、30(土)、12/1(日)の4日間行われました。千葉県森林インストラクター会からは各日4名、のべ16名が協力。森の案内やマナー指導を行いました。

活動報告(2002.9~12)

総合学習事業(國安)

概略()内はメーリングリスト送信日

印は以下に掲載あり。

9/20 学習林見回り(9/24)

10/15,17,25 学習指導(11/1)

11/2 秋の里山観察会(11/4)

12/13 学習林見回り(12/13)

資料等()内はメーリングリスト送信日

・インストラクターさんへ質問1~4(11/7)

滝野中学校里山学習

本埜村立滝野中学校の平成14年度環境学習指導計画にもとづく、森林インストラクターの里山学習指導は、後期を以下10月の3日間、全校生徒を対象に実施した。

学校側から、生徒がこれまで7回の里山観察を重ね、今回は、各課題総まとめの段階に入って最終の学習機会であり、「インストラクターさんに質問」と題する質問事項(全学年で110項目)を考慮にいれて現地指導をしてほしいとの要望が出され、急遽各項目に対する回答(別添)を準備して対応し、現地指導の時間不足等問題もあったが、一定の成果をあげ終了した。

今回の担当講師は、各日とも野間、湯本、國安の3名で、そのあらまは次のとおり。

【学習指導の内容】

14.10.15(午前10:40~12:30、午後1:55~3:45)3年生A.B組 計54名、各3班編成 講師3名、教師:校長、担任各1名

校庭に集合し、各班の講師・生徒が自己紹介、あらかじめ提出された「インストラクターさんに質問」の名前確認、インストラクターの先導で、学習林にいたる谷津田、水路沿いの生物を観察しながら林内に入り、各人の学習課題を中心に指導。最後に広場の丸太椅子に円陣をつくり、前記「質問」のまとめ。

14.10.17(同上)2年生A.B組 計63名、各3班編成 講師3名、教師:担任各1名

14.10.25(午前8:40~10:30、10:40~12:15)1年生A.B組 計62名、各3班編成 講師3

名、教師:校長、担任各1名(18日の雨天順延)

【今後の対応】

全校生徒の里山現地指導を終えて、まだまだ里山と人の共生関係という命題へ全体の関心を引き上げるまでには至っていないが、青山校長の言われる「まずは里山に親しむことを主眼」として、学校、村当局、地元民の一致した支持のもと、引き続き協力関係を維持していきたい。当面、教育委員会主催「わくわくふるさと探検隊」秋(11月)、冬(2月)の里山観察会の講師と各月1回の学習林見回りを15年3月まで行うことを予定している。

滝野中学校里山学習林見回り

日時 平成14年12月13日(金)10~12:30

場所 滝野中学校里山学習林、校長室

参加者 滝野中学校青山校長、森林インストラクター/野間・湯本・遠坂・國安

打合せ

- ・学校では各学年の学習結果発表会を予定していたが、初めての取り組みでもあり、形式にこだわらず3学期に里山学習全体の成果や反省を取りまとめることにしている、とのこと。
- ・昨日(12/12)里山学習の先進校でもある根郷中学校の担当教師が当学習林を訪れ、青山校長の案内で意見交換を行った模様。
- ・校長から、来年度も今年(里山)学習を更に進化させたかたちで継続させたい、森林インストラクターの皆さんも引き続き講師をお願いしたい、旨のお話があり全員快諾。
- ・学習林の次回見回りは、15年2月8日(土)の里山観察会の下見も兼ねて、15年2月1日(土)とする。

現地見回り

- ・初冬の学習林内は明るく、とりわけクヌギ、コナラの落ち葉が気持ちよく積もっていて、この1年の手入れの成果を実感する。
- ・小鳥の鳴き声、コゲラのリズミカルなキツキ音を身近に聞く。
- ・キノコは、カラカラに乾いたアラゲキクラゲ、足元の伐り株にエノキタケを見つけ、早速夕食に供す(國安)。秘密の場所のマンネンタケはまだ健在。
- ・数日前の雪も残る林内に、フユノハナワラビ

が花(孢子)をつけている。小動物は、冬眠。

- ・ 思わぬところでヤマコウバシが葉を残していたり、冬芽のおもしろさなど、木々の冬の姿もたのしい。
- ・ 学習林に近接し、道路の新設工事始まる。大型重機がうなりをあげ、今後の影響が心配。
- ・ 帰路、みんなで本埜村の水田に飛来の白鳥(コハクチョウ)約450羽を観察。

昼講座(遠坂)

概略

- 9/4 きのこと入門(9/4)
- 9/14 きのこと探し(9/16)
- 10/2 森林を支えるブナ科の植物(10/8)
- 10/8 森(自然)に親しむコツ(10/8)
- 10/30 森と水の話(11/26)
- 11/20 海を育み牡蠣を殖やす森(12/6)
- 12/4 竹の話・竹細工(12/6)

後期受講者数延 223名

前記受講者数延 216名

14年度計 439名

資料等

- ・ きのこのくらし(9/4)
- ・ 森に親しむコツ[しおり、インストラクター用、雨天インストラクター用](10/23)
- ・ 竹のはなし、竹のいろいろ(12/6)

「きのこ入門」

実施日 平成14年9月4日(水)10~12時

会場 市川市 信篤公民館

受講者数 40名

講師 遠坂 弘

庶務担当 石井・海野・山田・渋谷・和波

オブザーブ 平尾・国安・野間・菅野・湯本・

佐山・高橋

概要

- ・ 下期受講申込者43名のうち新規受講者20名弱。この傾向は各期毎に見られ新陳代謝が進んでおり森林理解普及のために望ましい傾向と考えます。他方リピーターの固定的顔ぶれも健在で講座のファン・支持者として大切にしなければいけない方がたであるの言うまでもありません。
- ・ 今回のように昼のスタッフ以外に多数のイン

ストラクターの皆さんが参加されたのは初めての事です。講習内容の稚拙さはお見逃し頂くとして講習の進め方、受講者の反応などつぶさに観察して頂きましたので率直な感想をお寄せいただければ私は勿論これからの担当講師にとって多々参考になると思います。

・ 「きのこ入門」と「きのこを探そう」は1セットなので前者は後者の予備知識付与が狙いで本番は後者。講師も前座と真打の関係といった方が適切です。

・ 講習内容のフレームについては添付レジュメを参照下さい。その各項目毎に説明要旨をフオートビジョンでテレビ画面に映し更に補足説明しながら受講者の理解を深める事に留意しながら進めました。

・ 力点は意図的に森林生態系におけるきのこの果たす重要な役割ひいては人間生活とのかかわりに最重点を置きました。

・ 一部のインストラクターの方から生物学的な内容(例えば核膜・細胞膜・細胞壁など)について受講者がどこまで理解できたろうかとの感想が聞かれました。講師としては力の及ぶ限り平易に具体的にかみ砕いた言葉で説明に努めました。とくにキーワードについてはくどいほど繰り返して理解を促しました。平易にとはとても難しいことですね。いずれ受講者の感想をお聞きする予定です。

・ そのほかの配布資料はきのこ検索表(分類別一覧)、森林ときこの種類(きのこの生える林・落葉上・地上・倒木・枯枝・木材上)、代表的な毒キノコの症状。

「海を育み牡蠣を殖やす森」

実施日 平成14年11月20日(水)10~12時

会場 市川市信篤公民館視聴覚室

受講者数 31名

講師 湯本

庶務担当 遠坂、山田、海野、和波、渋谷

オブザーバー 町原、小林、佐山

概要

森は海の恋人植樹祭参加(6月2日)室根神社特別大祭見学(10月27日)をもとに、漁師の森づくりについて話をしました。内容は次のとおりです。

- ・魚付保安林は岩礁海岸にあり、全保安林の0.3%にすぎない。魚類にとって重要なのは内陸の森林で、「森はすべて魚付林」「森と川と海はひとつ」のもと、漁民植樹運動が全国に広がる。
- ・海食物連鎖を支える植物プランクトンの増殖には、窒素とリンを吸収ための鉄が不可欠。森の腐植土層が生むフルボ酸が鉄と結合して“フルボ酸鉄”となり、川を流れて海に運ばれ、植物プランクトンに吸収される。
- ・宮城県唐桑町舞根でカキ・ホタテ養殖業を営む畠山重篤氏が、養殖業者に呼びかけ「牡蠣の森を慕う会」を結成し、岩手県室根山に木を植える「森は海の恋人」運動を展開する。平成元年の第1回植樹祭以来植えられた木は、ブナ・コナラ・トチ・カエデなど50種、3万本におよぶ。
- ・岩手県室根村と宮城県唐桑町が県境を越えて連携し、「森は海の恋人」の題材生かして、子供たちの体験学習を实践し、大人たちに環境問題を考えるきっかけをつくる。
- ・室根山8合目に、山と海の神である熊野神をまつる室根神社がある。約4年に一度特別大祭が行われ、1280余年前からの古式に則り、舞根の海水を神前に捧げる海の民による儀式で始まる。漁民が森の神と森の民への感謝の証として、室根山に木を植えるという発想の歴史的背景かもしれない。

「竹の話」・「竹細工」実施報告

実施日 平成14年12月4日 10～15時
 場所 千葉県青少年女性会館 美術工芸室
 受講者数 29名
 講師「竹の話」 遠坂 「花器作り」小林
 庶務担当 石井・山田・渋谷・和波
 花器作りアシスタント 高橋
 オブザーブ 佐山・湯本

(1)「竹の話」

思いもよらぬ事情の発生により準備の時間が制約されたため、設問形式によりできるだけ受講者との対話に心がけ、解説内容及び竹の写真をフオートビジョンを使ってテレビ画面に映しさらに補足説明しながら受講者の興味と理解を深

めることに努めました。

(2)「花器作り」

材料および作業用具は小林講師において全て準備。材料費として300円を徴収。作業に入るに当たり 鋸の使い方・竹の切り方・曲げかた・切り口を丁寧に磨くなど工作の留意事項の徹底の後、3班に分かれ3種類の花器の見本を参考に一斉に作業開始。当初ぎこちなかった動きも次第にほぐれて互いに協働しながら生き生きとした動作で製作に熱中。実に楽しい雰囲気でした。どの作品も画一でなく各人各様の個性が見られました。終了後班ごとに自作品を持って記念写真を撮りました。



花器作りの様子

野外講座(望月)

平成14年度・第4回森に親しむ野外講座

「ネイチャーゲーム体験とシカの森の観察」
 テーマ 森林と野生動物のかかわりを考える
 開催日 平成14年11月27日(水)
 開催場所 内浦山県民の森
 予定人員 24名程度

日程

- 7:30 参加者集合・受付
- 7:40 千葉出発
車内にて、県民の森紹介、房総のシカの現状について
NG「動物あてゲーム」など(アイスブレイクを兼ねて)
- 10:10 内浦山県民の森着、休憩
- 10:30 NG「はじめまして」、「いねむりおじさん」
- 11:30 昼食
- 12:10 シカの森の観察ハイキング
- 15:00 県民の森出発、NG「パーティカル

ポエム」

17:30 千葉帰着

スタッフ チーフ：望月、萩埜、御須

アシスタント：國安、湯本

【実施結果】

- ・参加者 24 名で、予定の 30 名を確保できませんでした。
- ・シカの森の観察ハイキングが 30 分オーバーし、その分、千葉帰着が 30 分遅れました。他は、ほぼ予定時間どおりでした。
- ・ハイキングでは、幸いシカの親子連れ 2 頭が出現、先頭の望月と参加者 2 名(?)が確認。声は全員が確認しました。
- ・奥谷第 2 ダムで、下見の際には 20 羽程度のオシドリ群れが観察されましたが、本番では数羽しか見られませんでした。

【企画者としての留意点と所感】

- ・野生動物をメインテーマに据えたのは、森に親しむ野外講座では初めてで、講師の解説中心でなく、受講者の気づきに重きを置いた手法も初めてでした。概ね好評だったように思います。
- ・ネイチャーゲームを取り入れました。これも初めてです。残念ながら参加者数で判断すると、あまり受け入れられなかったようです。受講者の反応は、まあまあでしたが、食傷気味の方もいたようです。効果としてはアイスブレーキングの要素を入れてスタッフ及び受講者相互の信頼関係をより緊密にする、受講者の気づきや創造性を引き出す、五感で捉え自然を多角的に捉える、と言った効果が得られたと思います。
- ・森に親しむ野外講座としては初めて、名札(あて名ラベル)を用意しました。お互いのコミュニケーションを促し、信頼関係を高める効果が得られました。
- ・スタッフ配置の考え方として、プログラム毎にテーマ担当講師 1 名を据え、それと別に受講者担当スタッフ 3 名(班毎)、安全確保スタッフ 1 名(ハイキングでは最後尾)を配置しました。参加者数に対して(予定では 30 名、結果は 24 名に対し 5 名)、これまでにない豊富な配置でした。万全と言ってよいかどうか、

結果的には何とも言えません。オブザーバー 1 名(寺嶋さん)がいたのは偶然で、配置スタッフではありませんでした。

【安全対策について】

ハイキングコースは、前半沢伝いで、後半岩交じりの尾根沿いであることと併せ、年配の参加者が多いことから、

- ・申込み受付の際、ハイキング経験の有無の確認を行いました。持病や日常の健康に関するチェックは行いませんでした。
- ・転倒による捻挫などの可能性が高いと考え、救急薬品は、三角巾、湿布薬、外傷薬など、捻挫、外傷関係のものを中心に携帯しました。
- ・行動前に下肢を中心に体操を行ない、行動中は転倒などに対する注意を頻繁に行いました。
- ・ハイキングのラストに 1 名スタッフを配置しました。
- ・県民の森管理事務所には、事前に、行動予定の全てを、口頭で伝えておきました。
- ・救急病院の事前確認は、行っていませんでした。(望月が、経験上知っていました。)

上総試験地作業(野間)

上総試験地の概要

千葉県森林研究センターに附属する林木育種事業の中核機関。房総丘陵の裾野、木更津市下郡(しもごおり)、小櫃川左岸の田園地帯に接する高台に所在。総面積約 14ha の中で、花粉症対策スギの種子生産、各種スギ品種の次代検定、マツノザイセンチュウ抵抗性マツの種子生産、ケヤキ密度試験、コナラ椎茸原木優良品種開発試験、ハチク栽培試験、樹木見本林展示などが行われています。

「上総試験地作業班」の来歴

引き続き林業不振の中で、林業関係の諸施設はどれも予算削減を迫られ、維持管理作業が困難になっているのを、森林・林業に関心あるボランティアが支援し、見返りに知識、経験、技術を修得しようという互恵の精神から発足、今年で 2 年目になります。現在、作業班員は 16 名。まだまだ増えることを願っています。月 2 回(第 2、第 4 火曜日)活動、JR 千葉駅北口 8 時発の車に分乗して通っております。

12月24日(火)の活動報告

参加者 = 小林、坂本（もりこん会員）、菅野、遠坂、山田、和田、和波、野間、計8名。

作業内容

- ・スギ次代検定林の枝打ち（1本梯子使用、地上4mまで枝打ち）
- ・マツノザイセンチュウ抵抗性マツ採種林の母樹欠損調査（抵抗性マツでも枯れるものあり）
- ・樹木名札作り（我々が調査した161本の樹木に名札を付ける予定で、目下、ヒノキ板の切断、鉋かけ、紐穴あけ作業中）ヒノキ林内に侵入してヒノキの生育を阻害するコナラを2本チェーンソーで伐倒、そのまま枯らしておいて、来春椎茸菌を食菌し収穫を楽しむ予定。

もりこん（寺嶋）

概略

- ・「もりこん27」平成14年9月26日（木）
話題：「里山をテーマにした本埜村立滝野中学校の総合的な学習」～非常勤講師としての4人の活動（中間報告）～
講師：國安
- ・「もりこん28」平成14年10月24日（木）
話題：・「絵と写真で見る、日本林業の変遷」『写真集 農山漁村の百年』講師：大竹
幼年科学絵本『ザイモク』の紹介 講師：寺嶋
- ・「もりこん29」平成14年11月20日（水）
話題：「『話の種』になる種子（タネ）の話出版記念」講師：石井

各回共時間 18：45～20：45 場所 市川公民館

もりこんは、千葉県森林インストラクター会が主催する、一般に開かれた「森に親しむ懇談会」です。もりこん30は、森に親しむ講座と併せ、通算85回目の開催です

「もりこん30」

実施日 12月14日（土）15日（日）

毎月、市川公民館で開催していますが、5年前から、12月は、正月のお飾り作りを行っています。講師は、夷隅町在住の森林インストラクター関隆夫さんですが、関さんは県立「いすみ環境と文化の里」を拠点とする活動の中心メンバーの一人です。昔からの南房総の里山文化の体験講座を地域のグループとともに実践されていますが、5年目にして、「もりこん」と地域の

活動とのつながりができました。昨年の10名参加に対して、今年



年は17名参加でした。炭焼き研修の炭材となる竹の伐採は、関さんのグループが2日間を費

やして行いました。私も、少し手伝いました。2日間にわたって、地元から尾形さん、河野さんに参加していただき、図らずも、竹カゴ体験講座をやっていただきました。しかも、マダケをわざわざ採りにいただき、竹ヒゴ作りの名人芸を披露していただき、カゴ作りも指導していただきました。さらに、正月のお飾り作りの指導も懇切丁寧にしていただき、とても密度の濃い2日間でした。

ただし、モウソウチクを炭材とした炭焼きは、はじめてでしたが、火力が強すぎ、炭化が早く始まり過ぎたようです。今回の出来具合（成功？失敗？）は、12月28日に明らかになります。

もりこんの目的は森に親しむことですが、今後も、関さんをはじめ、地元のメンバーのご協力により、夷隅地域の様々な里山文化を、もりこん会員が学び親しむ機会をゆっくり育て根付かせていければ素晴らしいと考えています。

炭焼きは成功!! でした。

12月28日（土）関さんや地元の尾形さん、河野さんはじめ8名で炭出しを行いました。結果は体積比で約1/3。多少の不安はありましたが、竹炭焼きとしては成功でした。「年間約4m（標高差）も竹が山を侵食しています。炭焼きが竹の有効利用につながれば...」というのが、関さんのコメント。FICが何らかの形で、貢献できればいいですね。（翔）



紙面の都合上、すべての活動報告は掲載出来ていません。また各講座で配布した資料は省略しています。ご希望の方は過去メーリングリストを参照、または、直接チーフ担当の方までお問い合わせください。

今後の予定

【14年度森に親しむ野外講座】

日時：平成15年2月25日(火)8~17時

場所：清澄山、東大演習林

テーマ：房総の原生林と高齢スギ林を訪ねる

ねらい：500年もの間複層林として維持されてきた清澄山スギ風致林、全国の大学演習林等の礎となった東大演習林の浅間山原生林、人工林の理想をめざす今澄スギ老齢林を訪ね、森林・林業の長期性、神秘さを学び感じとる。

コース：千葉駅NTT前～清澄寺駐車場～清澄山風致林・昼食～浅間山原生林～今澄スギ老齢林～清澄駐車場～千葉駅NTT前

募集人員：33人+FIC4～5名(バス乗車人員)

参加費：4,000円

スタッフ：(チーフ)國安・和田、

下見：第1回平成15年1月15日(水)第2

回(直前)2月17～21日の間で調整中

【上総試験地作業】

日時 平成15年1月14日(火)9:30～15:00

集合 JR千葉駅北口8時00分

作業内容 スギ次代検定林の枝打ち 樹木名札作り。参加者は野間さんまでご連絡下さい。

インストラクター会新入会員の方々には特にご参加をお勧めいたします。(昨年の新入会員3名が参加されていますが、好評です。)

各講座の連絡や下見の日程、実施報告などは、メーリングリストで随時流されます。ご確認を。

何でも投稿欄

※自由投稿欄です。ドンドンご投稿ください。

望月さんから、ご自身が代表を務める「茂原自然大好きクラブ」の活動報告です。

【落ち葉で遊ぼう！やきいもやろう！】

日時 11月24日(日)10時～15時

参加者 29名〔子供12名、大人17名〕

場所：笠森キャンプ場

集合、自己紹介をしてから、とにかく寒いので、身体を暖めるためのゲーム(「木とリス」メジロバージョンなど)を行いました。その後広場で、落ち葉を使ってネイチャーゲームの「大きな葉っぱ」で遊び、「フィールドビンゴ」(笠森オリジナル)をしながら、ユートピ

ア笠森横の展望台まで往復しました。キャンプ場に戻って、かまどの火に、みんなで焼き芋にするお芋を入れてから、昼食としました。お昼休みに、予期していなかったのですが、子ども達が集まって、イチヨウの木の周りで、風に舞い散る落ち葉を夢中で追いかけて遊んでいました。子ども達は、本来何もなくても、いつの間にか自分たちで遊びを見つけてしまうことを、つくづく感じ、その自然さに、ちょっとした感動を覚えました。午後は、落ち葉をみんなで拾ってきて、落ち葉絵作りです。1時間くらいで仕上げ、みんなで発表しました。大きな枯葉を使ったフクロウ、イチヨウの葉っぱのキツネ、ムラサキシキブの実のブドウ、赤や黄色の葉っぱでデザインした花、等々。中でも炭で黒く塗った「夜の森」はとても幻想的で、発想の豊かさに一同感激しました。最後は、何と言っても、本日のメインイベント、最大の楽しみ、やきいもタイムです。ちょっと焦げ過ぎのところもありましたが、とてもおいしかったです。やっぱりやきいもはいいですね。もう一つ申し添えると、Kさんが笹で作ってくれたブービー笛も子ども達にとっても好評でした。

☆☆☆事務局連絡☆☆☆

祝合格！歓迎！！平成14年度合格者

平成14年度森林インストラクター資格試験合格者238名中で千葉県出身者は、次の13名です。おめでとうございます。林克美、吉田明子、増田俊郎、小橋一民、中野達也、柴田沙織、野村昭夫、土屋守、今井しのぶ、藤田和孝、伊東茂子、平野正敏、内山武明(順不同・敬称略)

平成15年新年会のお知らせ

今年度の合格者を交えて新年会開催します。

日時 平成15年1月25日(土)17時～

会場 加賀屋(船橋市本町4-42-7 047-423-3364)

船橋駅南口下車、海岸に向かって左側を歩いてマツモトキヨシを左折。徒歩5分。奮ってご参加ください。

参加希望者はお早めに事務局長菅野さんまでご連絡く

千葉県森林インストラクター会会報

2003年1月1日 発行第3号

年4回発行予定(4月・7月・10月・1月)

発行人：町原 亨

編集スタッフ：秋山 進、鳥海 翔

連絡先(町原)：船橋市夏見台4-19-1-406

TEL&FAX:047-439-3016 〒273-0866

Eメール：machihara@mx5.ttcn.ne.jp

ださい。

千葉県森林インストラクター会会報

2002年9月1日 発行第2号

年4回発行予定(6月・9月・12月・3月)

発行人：町原 亨

編集スタッフ：秋山 進、鳥海 翔

連絡先(町原)：船橋市夏見台4-19-1-406

TEL&FAX:047-439-3016 〒273-0866

Eメール：machihara@mx5.ttcn.ne.jp